二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

春は（①）。⑥やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃は（②）、闇も⑦なほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るも⑧をかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして（③）いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、（④）、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬は⑨つとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、⑩いとつきづきし。昼になりて、ぬるく（⑤）、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

1　①～⑤に、あてはまる言葉を書きなさい。

2　⑥・⑦を現代仮名遣いに直しなさい。

3　⑧・⑨・⑩の現代語訳を書きなさい。

4　たなびきたる　の主語にあたる言葉を、漢字一字で書き抜きなさい。

5「夏」の段落で筆者が言っているのは、どういうことか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　月夜であるより、蛍の飛んでいる夜の方がよい。
イ　月の夜がよいが、蛍の飛ぶ闇夜や雨の降る夜もよい。
ウ　月夜や蛍の飛ぶ闇夜よりも雨の降る夜がよい。
エ　月夜であって、しかも蛍が飛び交えば最高である。

6「秋」の段落について

（1）二つに分けるとどこからが後半になるか。初めの三字を書きなさい。

（2）前半と後半の情景の捉え方は、どのように違うか。空欄に体の一部を表す言葉を入れなさい。

前半は（①）で、後半は（②）で捉えた情景。

7　筆者は、なぜ「わろし」というのか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　よくおきている炭火を持っていくと皆に褒められるから。
イ　炭火は寒さの中でかっと燃えているのが冬らしいから。
ウ　誰もが火桶を片づけようとしないのがだらしないから。
エ　火が弱くなって、手をかざしても暖かくないから。

解答

6	4	2	1
(1) 日入り	雨云	⑥ようよう	① あけぼの
5			
(2) ① 目	ア	⑦なお	② さらなり
		8	
② 耳		⑧ 趣がある	③ 山の端
7		⑨ 早朝	④ 三四つ
イ		⑩ つかわしい	⑤ 鳴くべもていりは

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂く覚えて、ある時思ひ立ちて、ただ一人かちより詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、①かばかりと心得て帰りにけり。さて、かたへの人にあひて、年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何ごとかありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、②山までは見ずとぞ言ひける。少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。【第五二段】

B　ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて、的に③向かふ。師の言はく、「初心の人、④二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度、ただ、得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」と⑤言ふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと⑥思はんや。⑦懈怠の心、みづから知らずといへども、師、これを⑧知る。この戒め、万事にわたるべし。【第九二段】

1　①かばかりと心得て　とあるが、法師はどう思ったのか。次のA・Bに入る言葉をそれぞれ三字で抜き出しなさい。

（A）と高良などだけが、（B）だと思いこんだ。

2　②山までは見ず　とあるが、そのわけを十四字で書き抜きなさい。

3　Aの文章で筆者の考えが書かれている一文を探し、初めの五字を書きなさい。

4　③・⑤・⑧の主語は、それぞれ、「ある人」と「師」のどちらか。あてはまるほうを書きなさい。

5　④二つの矢を持つことなかれ　とあるが、それはなぜか。「集中」と言う言葉を使って現代語で二十字以上三十字以内で書きなさい。

6　⑥思はんや　の口語訳を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　思ってはいけない　　イ　思うだろうか。　　ウ　思ったのだ　　エ　思うだろう

7　⑦懈怠の心　と同じ意味の言葉を六字で抜き出しなさい。

解答

19

三

1 A 極楽寺　B 石清水

2 神へ参るこそ本意なれと思ひて

3 少しのこと

4 ③ ある人

5 ⑤ 師

6 ⑧ 師

7 二本目の矢を頼みにしてしまい、一本目の矢に集中できないから。

7 なまけだらの心

6 イ

一　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

A

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、（　　ア　　）。

夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

B

冬は（　イ　）。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

問1この作品について次の（　　）にはいる言葉を、漢字で答えなさい。

この作品の題名を、（①）という。（②）時代に書かれた書物で、作者は、（③）である。

作者が思ったことを書きつづった文章で書かれており、この書き方を（④）という。

問2ぼう線部Aを現代仮名遣いになおしなさい。

問3ぼう線部Bを口語訳（現代語訳）しなさい。

問4（ア）（イ）に入る言葉を書きなさい。

問5「春はあけぼの」を現代語に改めるとき、（　　）に入る、現代語を書きなさい。

春は、（　　）が（　　）。

問6夏の「夜」の闇をいっそう趣のある情景としているものを三つ書きなさい。

問7筆者は夏の良さをどう感じているか。次から一つ選び記号で答えなさい。

ア　月夜は美しく、蛍が飛ぶ闇夜や、雨が降る夜よりも趣がある。

イ　月夜はもちろん、蛍の飛ぶ闇夜や、雨が降る夜も趣がある。

ウ　月夜よりも、蛍の飛ぶ夜の方が、趣がある。

エ　月夜にはそれほど価値があるわけではない。

問8秋の「夕日のさして」と働きが違うものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　烏の寝どころへいくとて　　イ　雁などのつらねたるが

ウ　虫の音など　　エ　蛍の多く飛びちがひたる

問9「趣がある」という言葉は二つ使われている。そのうちのしみじみとした風情を表す三字の言葉を書き抜きなさい。

問10冬の「さらでも」は「そうでなくても」という意味であるが、その内容を次から選びなさい。

ア雪や霜がなくても　　イ　雪がつもっていなくても

ウ寒く感じられても　　エ　霜でまっ白でも

問11この文章の特徴を次から一つ選びなさい。

ア　昔から言い習わされた四季の特徴を、簡潔に表現している。

イ　四季の特徴を、事実に即して淡々と描いている。

ウ　女性だけがつかめる四季の特徴をわかりやすく述べている。

エ　四季の特徴的な美しさを、鋭い感覚で生き生きと捉えている。

解答

一　2点×7　1点×8

1	① 枕草子	2	ようよう	3	言いようもないほど趣がある	
	② 平安					
	③ 清少納言					
	④ 随筆					
4	ア 紫だちたる雲の細くたなびきたる		イ つとめて			
5	春は、夜明け頃が、いと	6	月 蛍 雨	7	イ	
8	ウ	9	あはれ	10	ア	11	エ

三　次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

仁和寺にある法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拝まざりければ、心憂く覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとりかちより詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たし侍りぬ。聞きしにもすぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達はあらまほしき事なり。

問1　かばかりと心得て　の意味としてふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　二度と来たくないと思って　　イ　これだけと思いこんで

ウ　これだけかとがっかりして　　エ　また来ようと心に決めて

問2　年ごろ　の意味を簡単に書きなさい。

問3　尊くこそおはしけれ　の「こそ」と「けれ」の関係を、何の法則と言いますか。四字で書きなさい。

問4　この文章のおもしろさはどんなところにありますか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　法師の誤解の激しさに、聞いている人々が感心するばかりで本当のことを教えないところ。

イ　法師が知ったかぶりをして、目上の人にまちがったことをあれこれ教えているところ。

ウ　法師が自分の失敗に気がつかないで、得意気にしゃべっているところ。

エ　法師が自分の失敗をとてもうまくごまかしているところ。

四　次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

ある人、弓射ることを習ふに

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて、的に向かふ。師の言はく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度、ただ、得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」

と言ふ。

わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師、これを知る。この戒め、万事にわたるべし。　　【第九二段】

問1　初心の人　は、どう思って矢を射るのがよいと師は言っていますか。九字で書き抜きなさい。

問2　これ　とは何を指していますか。文中の言葉、五字以内で書き抜きなさい。

問3　この文章は、ある出来事を紹介して、そのあと筆者の考えを述べる形になっています。筆者の考えが書かれているのはどこからですか。最初の五字を書きなさい。

解答

三

問1　仁

問2　長い年月

問3　係り結びの法則

問4　ア

四

問1　この一矢に定むべし

問2　懈怠の心

問3　この戒め